

成徳軍における王氏政権の瓦解と沙陀の後唐建国

新見まどか

九世紀末から十世紀初頭にかけて、唐朝が解体に向かうと、全国各地には李克用や朱全忠に代表される新興の軍閥が割拠した。一方、従来唐朝の藩鎮対策の主眼であった河朔三鎮は両者の間で翻弄され、やがて後梁ないし後唐政権に吸収されていった。

この河朔三鎮の中で、最も長く命脈を保ったのが成徳軍である。成徳軍は、魏博・盧龍節度使がそれぞれ朱全忠・李存勳に降った後も、藩帥王鎔が亡くなる921年までその独立を維持した。王鎔は四〇年近くに亘って成徳軍を支配した人物だが、当時の成徳軍は決して軍事的に優勢ではなかった。ところが、強大な外圧にも拘らず何故これが存続できたのか、またその政権の瓦解が何を意味したのかについては、これまで十分な考察が行われてこなかった。

ところで王鎔については、その墓誌が清代の石刻史料集等に収録されている。ただし、それは全体のほぼ半分が欠損していたらしく通読が困難で、これまでほとんど利用されてこなかった。しかし実はこの墓誌には拓本画像が存在し、誌文の全体構造を把握することができる。そしてそれを分析すると、本墓誌の作成が沙陀の李存勳による後唐建国と深く関係していたことが判明する。

そこで本発表では、まず拓本画像を踏まえた「王鎔墓誌」の復元と内容の分析を行い、次に王鎔と李存勳の関係性を、特に政治的側面に注目して考察する。そして、李存勳が王鎔と提携した背景を、婚姻に基づく政治的権威、及び仏教という宗教的権威の二方向から考察し、王氏政権が李存勳による後唐建国とどのように関わっていたのかを解明する。併せて、安史の乱直後から後唐に吸収されるまでの成徳軍の性質の変化を追い、王氏政権の滅亡が持った歴史的意義を考察する。